

P-250 妊娠中期におけるクラミジアの産道感染と配偶者の感染状況の検討

宮崎医大

野田俊一, 池田智明, 池ノ上克

【目的】妊婦のクラミジア感染の治療に際して、ピンポン感染を防止するために配偶者の治療が重要である。また、配偶者が泌尿器科を受診するモチベーションを高めること、さらに泌尿器科における感度良い検査が必要である。我々は、泌尿器科と共同し配偶者のスクリーニングを行っている。今回、妊婦とともに配偶者の感染状況の検討をおこなった。【方法】平成12年7月から平成14年8月に受診し、妊娠4ヶ月の時点で検査に同意を得た妊婦833例に子宮頸管のクラミジア検査(アンプリコアSTD-1:PCR)を行った。また、陽性者の配偶者には泌尿器科受診を勧め、各症例に尿 C.trachomatis 検査(1. 来院時尿のPCR法:10例 2.尿道スワブのDNA probe法:11例 3.尿道スワブのPCR法:4例)をおこなった。また、平成14年4月から配偶者が泌尿器科を受診するよう産婦人科側で紹介状を交付し、受診日に早朝第1尿を採取し持参し、早朝尿PCR法を8例におこなった。【成績】対象妊婦833例中72例(8.2%)が陽性であった。年齢別の陽性率では、20~24歳が29/204(14.2%)と最も高かった。陽性者の配偶者の検査での陽性率は、来院時尿のPCR法20%(2/10例)尿道スワブのDNA probe法27.3%(3/11例)、尿道スワブのPCR法0%(0/4例)早朝尿PCR法75%(6/8例)と明らかに早朝尿PCR法が高率であった。【結論】妊婦の C.trachomatis 陽性者は20歳代に陽性率が高かった。また陽性者の配偶者の検査では早朝尿PCR法が有効であることが示唆された。

P-251 クラミジア感染症：未婚婦人における淋菌合併感染の増加

愛媛労災病院

宮内文久, 大塚恭一, 南條和也

【目的】クラミジア感染症が増加していることを既に報告してきた。近年、クラミジア感染症が若年婦人に広がっていることや淋菌との合併感染症が増加していることなど、その実態を明らかにしようと試みた。【方法】平成5年1月から平成13年12月までの期間に、微熱や下腹部痛、帯下の増加などを訴えて受診した婦人において、microtrak法によりクラミジア抗原を検出した場合をクラミジア感染症と診断した。受診者4384名のうち721名がクラミジア抗原陽性であった。なお、細菌培養にて淋菌を検出した場合を淋菌感染症と診断し、55名が陽性であった。【成績】クラミジア感染症の病態は子宮頸管炎・子宮内膜炎175名、子宮付属器炎382名、骨盤腹膜炎146名、Fitz-Hugh-Cartis症候群18名であった。クラミジア感染症数はH5年の54名からH13年の115名へと増加した。この期間に、クラミジア感染症患者に占める未婚婦人の割合は31.5%から47.8%へと増加した。このうち、19歳以下の女性の割合は5.8%から7.5%へと、20歳から24歳までの女性の割合は35.9%から36.3%へと増加した。クラミジア感染症患者の淋菌合併感染率はH5年の1.1%からH13年の13.9%へと顕著に増加した。この合併感染率は既婚婦人では2.7%から11.7%へと、未婚婦人では0%から16.4%へと増加した。【結論】クラミジア感染症は増加しつつあり、しかも若年婦人や未婚婦人に浸透しつつあること、淋菌との合併感染症が増加しつつあることが明らかとなった。

P-252 multiplex PCR法を用いた細菌性膣症の客観的診断法の確立

筑波大

安岡真奈, 濱田洋実, 藤木 豊, 宗田 聡, 吉川裕之

【目的】細菌性膣症(BV)は早産の危険因子であり、特に早産の既往がある妊婦ではスクリーニングと治療が必要とされる。しかし、その診断は主としてグラム染色による起因菌の推定によって行われており、未だ客観的な診断法はない。そこで本研究は、multiplex PCR法による菌種の同定を利用したBVの診断法を新しく確立することを目的とした。【方法】BVの主要起因細菌である *Mobiluncus* 属(*M. mulieris*, *M. curtisii*)、*Bacteroides fragilis*、*Gardnerella vaginalis*の各々に特異的な遺伝子配列を検出するprimer対を作成し、これらを同時に検出できるようにPCR反応条件の設定と精度管理を行った。さらに、インフォームドコンセントの得られた患者から採取した膣分泌物検体について、グラム染色によるBV診断の結果とmultiplex PCR法による診断の結果とを解析した。【成績】採取された1,000検体中グラム染色所見からBVと診断されたのは184検体であった。これらの検体についてmultiplex PCR法による検出を行ったところ、*Mobiluncus* 属、*B. fragilis*、*G. vaginalis*の陽性率はそれぞれ22%、8%、68%であった。一方、グラム染色所見からBVと診断されなかった検体ではそれぞれ0%、1%、4%であった。1種類以上の目標菌が検出できたものをBVと診断した場合、multiplex PCR法による診断は、感度78%(95%信頼区間(CI):65-92%)、特異度96%(95%CI:92-99%)、陽性適中率83%(95%CI:70-95%)、陰性適中率94%(95%CI:90-98%)であった。【結論】multiplex PCR法を用いたBV診断法の結果はグラム染色による診断結果と良く一致し、同時に菌種の同定も可能であり、BVの新しい診断法を確立することができた。